

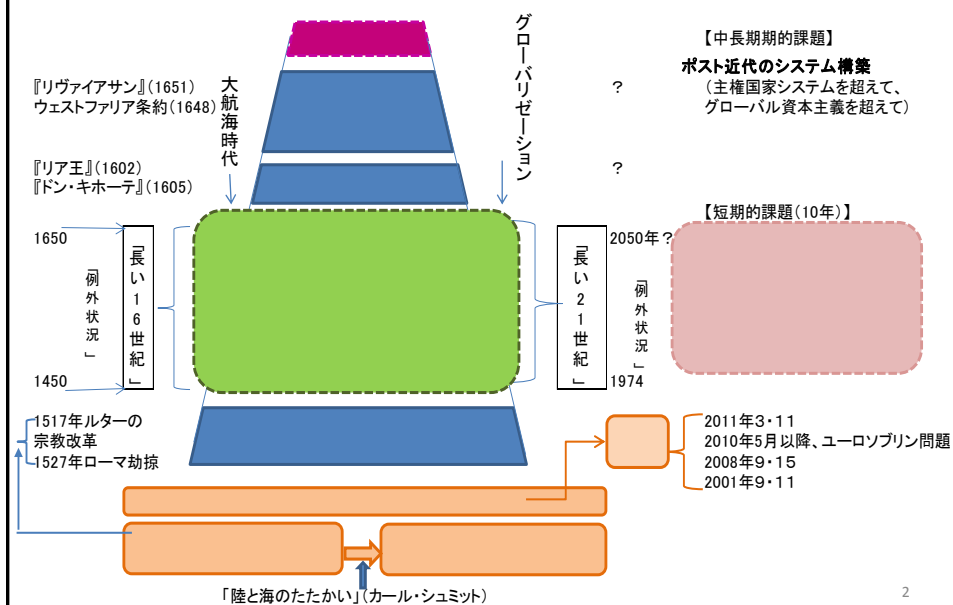
過剰マネーと利子率革命 ～グローバル化の真実～

- I. 現状認識
 - －「蒐集」の限界と過剰マネーの蓄積
- II. 短期的課題(10年)
 - －「蒐集」からの撤退
 - …国境を超えるマネーの抑制
- III. 中期的課題(30～50年)
 - －近代を超えて
 - …ポスト近代システムの構築

平成24年5月12日
内閣官房内閣審議官
水野和夫

1

「歴史の危機」と「利子率革命」



2

欧米の基本原則－「陸と海」、「蒐集」

①「世界史は陸と海のたたかい」(カール・シュミット『陸と海と』1942)

「主権者とは、例外状況にかんして決定を下す者をいう」(同『政治神学』1934)

②「社会秩序それ自体が本質的に蒐集的なのであって、分類、規則、ラベル、集合そしてシステムに則って成立する」(ジョン・エルスナー『蒐集』)

- (古典的)帝国とは軍事力を通じて諸国、諸民族を蒐集
- 近代国民国家(近代帝国)とは、市場(たとえば、グローバリゼーション)を通じて、諸地方・諸部族そしてマネーを蒐集

③「偉大なコレクションとは膨大なということであって、完成しているということではない。・・・(中略)蒐集家が必要とするのはまさしく過剰、飽満、過多なのだ」(スーザン・ソントグ『火山に恋して』)

3

「歴史の危機」におけるリーダーシップ

【危機とは(米国の政治学者ロバート・ダール)】

- 「あるシステムが時代の要求に適応しなくなり、新たなシステムへ移行する時に起る現象だ」

【歴史における危機】

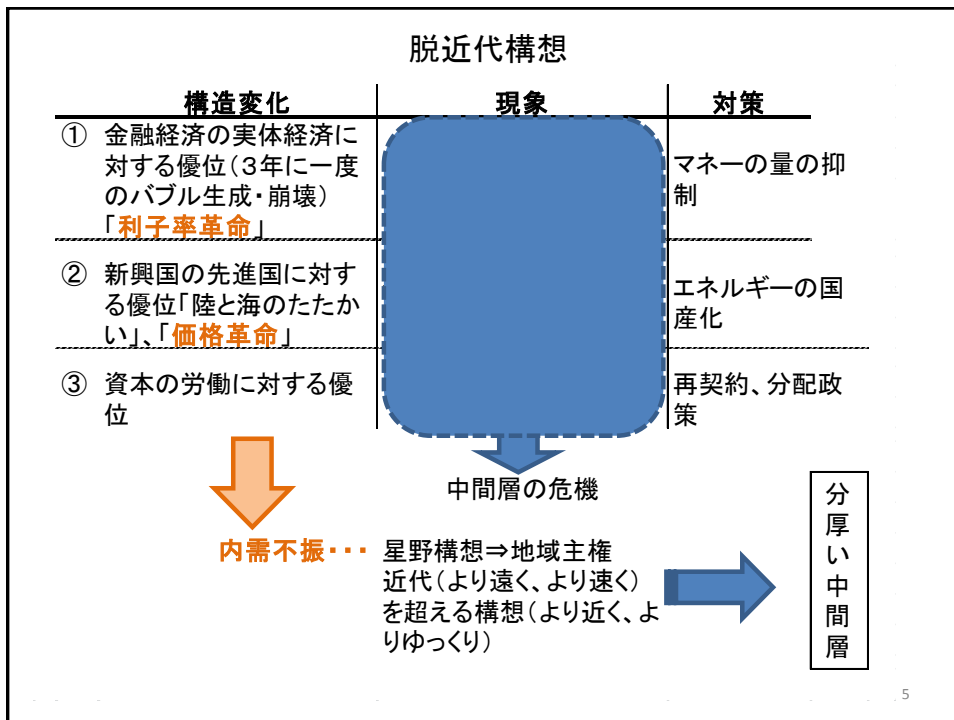
(スイス歴史学者ブルクハルト)

- 1789年フランス革命～1848年ヨーロッパ革命
- 1517年宗教改革～1648年ウェストファリア条約

【危機の時代における政治家】ビスマルク(Steinbergペンシルバニア大学教)

- 秀れた政治家は、政治の流れを作るのではない。そうではなくて、その流れに乗り、舵取りをするのだ。ビスマルクは政治的現実の限界ギリギリまで動き、「政治とは、the art of possibilityである」と定義される政治を行なった。

4



帝国システムとグローバリゼーション

— 中心(ミュージアム思想)と周辺を結び付ける
グローバリゼーション

・ 帝国とグローバリゼーションの関係

— 中心と周辺を結び付けるイデオロギーのひとつが
グローバリゼーション(本質的)

— ヒト、モノ、カネの自由な移動(表面的)

・ カフカの帝国

— 外縁が確定したとき、帝国は死を迎える

・ 「近代自身が反近代を生み出す」

— 9.11(2001)、9.15(2008)、3.11(2011)

— 海と空の支配、金融、エネルギー

① グローバリゼーションとは

- しかし、グローバル化には明確な定義がないのである(p1)
- グローバル化についての文献はすでに膨大にあり、しかもさらに増大しつつあるのに、グローバル化についての適切な理論も、その主要な特徴についての分析ないのは驚くべきことである。『グローバル・トランスフォーメーションズ』(ディヴィッド・ヘルド、アンソニー・マグルー、ディヴィッド・ゴールドフラット、ジョナサン・ペラトン、1999(原著)、古城利明・臼井久和・滝田賢治・星野智、2006)

② 帝国とは

- 「『帝国』とは絶えず辺境(フロンティア)を拡張しつづけようとする絶え間ない闘争の別名であり、その限りにおいて、「帝国」の領土の辺縁はつねに曖昧にぼやけており、広がろうとする力とそれを押し戻そうとするもう一方の力との葛藤が演じられる流動的な場として、一瞬たりとも固定することはない。可視的なかたちで確定した外縁を持ったとき、その帝国はすでに死んでいるとさえ言える。(松浦寿輝「帝国の表象」、『帝国とは何か』)

7

3-3. 帝国の3要素

- 【**帝國的な支配と被支配の関係**】・・・3つの要素
- ①強力な中央統治機構を備える中心
- ②中心からの影響力に対して抵抗力の弱い周辺
- ③中心と周辺を結合するトランスナショナルな軍事的・経済的あるいはイデオロギー的な諸力・諸装置

重商主義、自由貿易主義・帝国主義・グローバリゼーション・新自由主義、ミュージアム

8

I . 現状認識

- ①1974年以降、「歴史の危機」
- ②2001年9・11以降、「例外状況」
- ③9・11、9・15、3・11、ユーロソブリン問題・・・「蒐集」の限界

9

I . 現状認識

－蒐集の限界と過剰マネーの蓄積

- ①1971年ニクソンショック、1973年石油危機、1975年ベトナム戦争、米国敗北、1979年イスラム革命(第2次石油危機)・・・交易条件の悪化とアジア市場の拡大停止



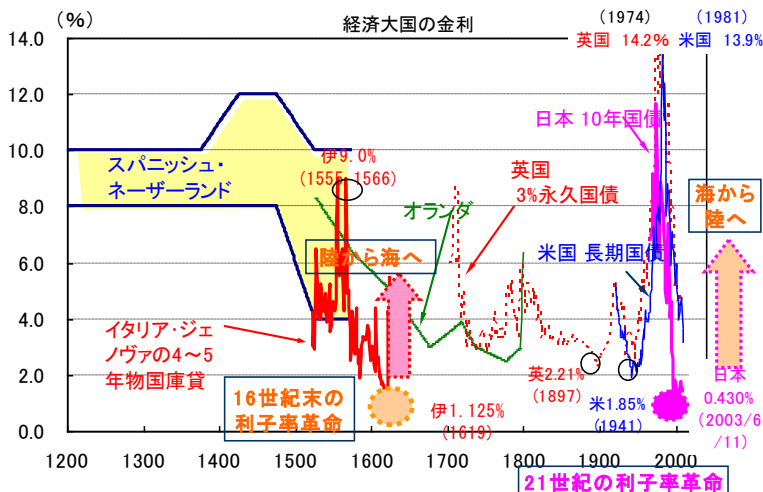
(金融化、高付加価値化、大型化)



- ②9・11、9・15、3・11、ユーロソブリン問題・・・無理な前進(蒐集)は大幅な後退を招く
-
- ①1970年代半ば、先進国の利子率、ピークアウト、
 - ②1997年以降、10年国債利回り、2.0%割れ続く¹⁰

21世紀の「利子率革命」と「歴史の危機」

— 1997年9月以降、日本の10年国債利回りは2.0%以下で推移(2011年9月で15年目)、米10年国債利回り、2011年8月18日、戦後初めて一時2.0%割れ
17世紀イタリア・ジェノバ(11年間、2.0%割れ)を更新する人類史上最低利回りを実現



11

「歴史の危機」に常におきる富の集中と貧困化

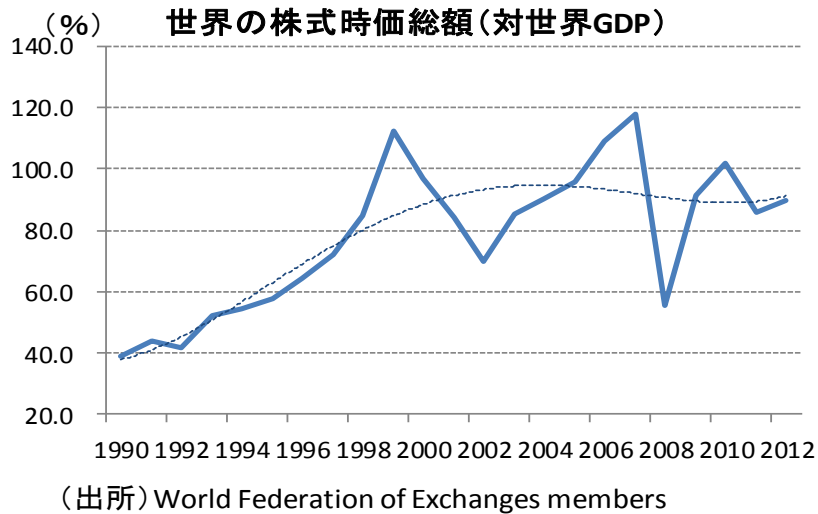
-既存のシステム強化を目論む「構造会改革」(1973年9月11日以降の新自由主義的改革)⇒国家(帝国)の衰退

既存体制	ローマ帝国	中世キリスト教社会	近代社会(主権国家)
反乱(革命)	征服戦争と内乱の時代 (B.C.133~B.C.31)	宗教改革(1517年)	パリ世界革命(1968年)
利子率革命	1世紀	16世紀半ば~17世紀前半	20世紀末~21世紀
(金利水準)	4.0%	2%以下(1611~21年)	2.0%以下(1997年以降、現在14年目)
(時期)	(B.C.25~A.D.97)	(1555~1619年)	(1974年~?)
経済繁栄	アウグストゥスの時期	ジェノバ人の世紀	ジャパンプランパーワン
(時期)	(紀元前30~紀元14年)	(1557~1627年)	(1979年~)
二極化(貧困層の増大)	・「財産の没収と集中の時代(ユリウス・クラウディウスの時代(紀元41~54年))」 ・「都市化と階層分化の時代」(A.D.69~180)	「価格革命」(利潤革命) (1477~1650年) 「世の中じゃ家柄は二つきやねえ。持ったのと持たねえのと」(サンチョ・パンサの祖母)	「金融の時代」 (1971年~) 「名目GDP成長率<10年国債利回り」 成長戦略と国債の大量発行 金融資産保有者有利

12

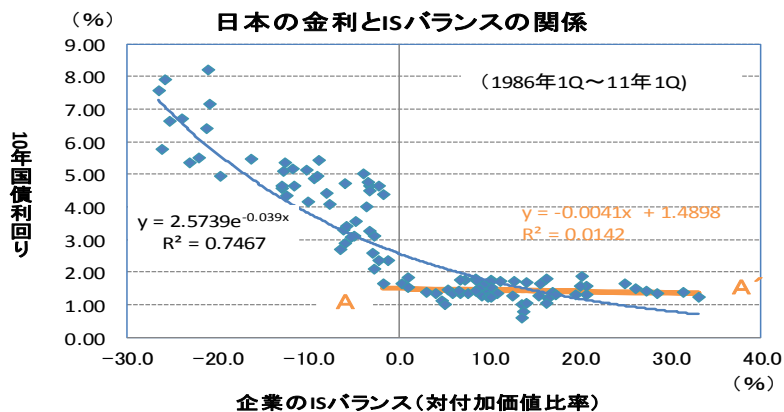
過剰な世界のマネー

「3年に一度繰り返すバブル」・・・内需デフレターの下落



13

貯蓄超過と超低金利(超低利潤率)



- (注) 1. ISバランス＝貯蓄(S)－投資(I)
 2. 貯蓄＝[流動・固定引当金＋特別法上の引当金＋その他剰余金]の期首・期末増減額
 3. 投資＝固定資産投資(土地、設備、無形固定資産)＋在庫投資
 4. 付加価値＝人件費＋営業利益
 5. ここでの企業は中小企業・製造業と非製造業・規模計を合算
 (出所) 財務省「法人企業統計季報」

14

「世界は病院である」(鈴木忠志『リア王』演出ノート)

<http://www.scot-suzukicompany.com/works.php>

さきほど私は、人間はすべからく病院にいると言った。人は病院である以上、医者や看護婦がいると考えるだろうし、病人の病気は回復の希望があるだろうと考えるだろう。しかし、世界あるいは地球全体が病院だと見做す視点においては、この考えは成り立たない。看護婦も病人そのものであるかもしれないのである。そして病気をなおしてくれる医者という存在は、存在すらしていないかもしれない。

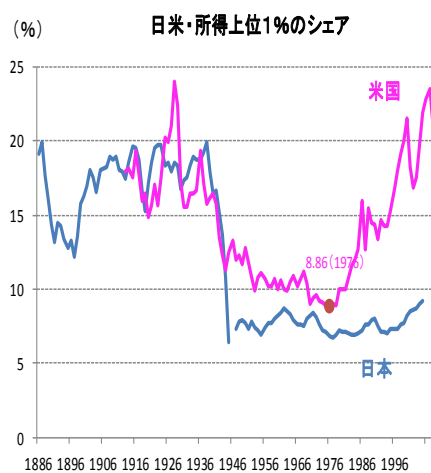
(中略)

私も私自身が病人ではないかと疑っている。そして、その原因はなにに起因しているかを絶えず考え続けている。その考察あるいは分析の結果のひとつが、シェイクスピアの『リア王』に刺激を受けて創ったこの『リア王』である。

世界あるいは地球全体が病院である以上、快癒の希望はないかもしれない。しかし、いったい人間はどういう精神上的の病気にかかっているのかを解明することは、それが努力として虚しいことになるとしても、やはり現代を芸術家(創造者)として生きる人間に課せられた責務だと信じている。

15

富の集中-米国では所得上位1%の人が所得の24%を占有



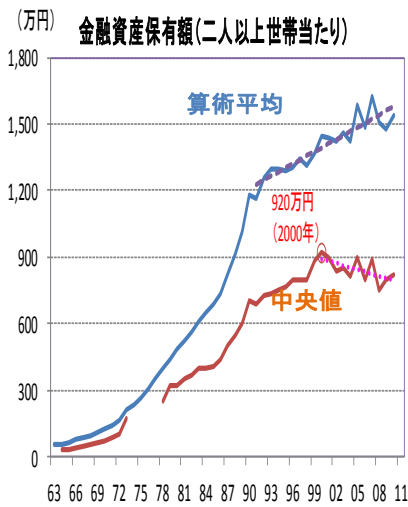
(注) 賃金のほか、事業収入、利子・配当を含む
(出所) "The World Top Incomes Database"



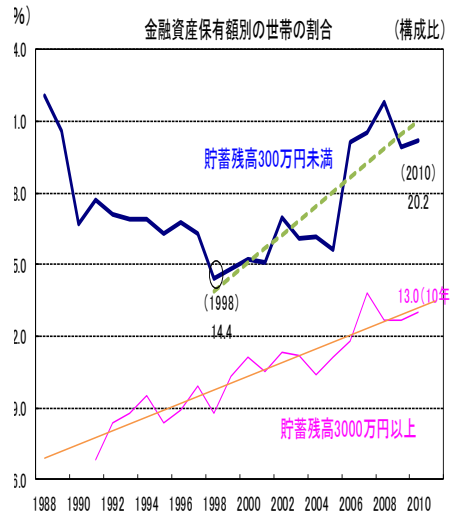
(注) 賃金のほか、事業収入、利子・配当を含む
(出所) "The World Top Incomes Database"

16

2000年以降減少する金融資産(中央値)



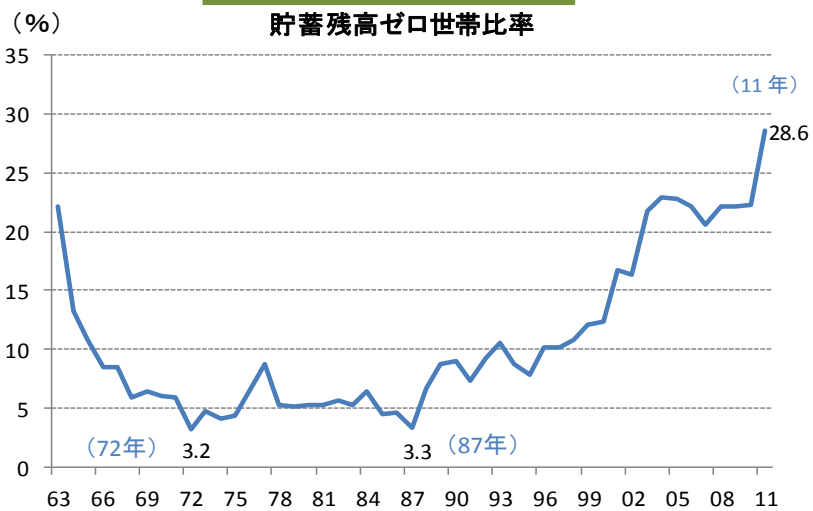
(注)対象は金融資産保有世帯のみ
(出所)日銀「家計の金融資産に関する世論調査」



(出所)日銀「家計の金融資産に関する世論調査」

17

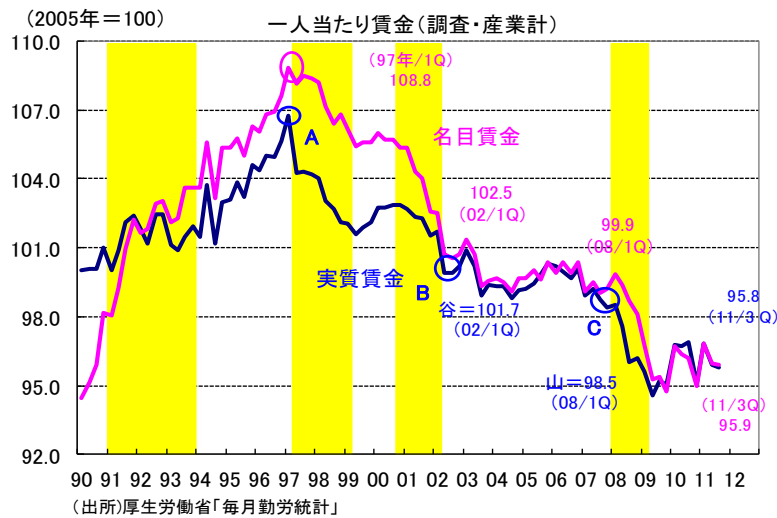
痩せ細る中間層



(注)調査対象は全国8000世帯(世帯主が20歳以上でかつ世帯員が2名以上の世帯)
(出所)金融広報中央委員会「家計の金融資産に関する世論調査」

18

戦後最長の景気回復でも増えない賃金

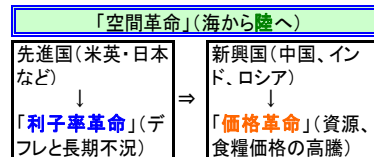
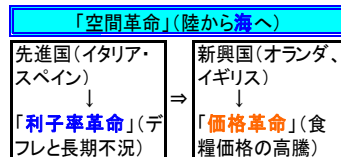


19

16世紀のスペインVS. 21世紀の米国

①「歴史における危機」の前半戦・・・主役は旧勢力

15-16世紀	20-21世紀
E' 1 1493.5.4 「最初のグローバルライン」	E1 1973.9.11 チリ・クーデター
E' 2 1517.10.31 ルターの宗教改革	E2 1973.10.6 第1次石油危機(第四次中東戦争)
E' 3 1545年 ポリビア・ポトシ銀山発見(スペイン)	E3 1995年 「強いドルは国益」
E' 4 1527.5.6 []	E4 2001.9.11 世界同時多発テロ
E' 5 1557 スペイン、フランスの財政破綻	E5 2008.9.15 リーマンショック



②後半戦・・・主役は新興国

- E'6 1605ないし1606年 『リア王』シェイクスピア
- E'7 1618～1648年 30年戦争
- E'8 1635～1637年 チューリップバブル
- E'9 1648年 ウェストファリア条約
- E'10 1651年『リヴァイアサン』 ホッブズ

20

得意分野における「蒐集」の蹟き

- 9・11・・・「海の国」米金融帝国(ワールド・トレード・センタービル)、米軍事力(ペンタゴン)に対するテロ
 - 9・15・・・米ウォール街(金融工学)の自滅
 - 3. 11・・・20世紀「技術の時代」⇒宗教の魔術性が技術の魔術性へ転化(C・シュミット)
 - ユーロゾブリン問題・・・「陸の国」ドイツ第四帝国の辺境化(ギリシャetc)の失敗
-
- 16－17世紀、「陸の帝国」スペイン・無敵艦隊(陸軍の下部組織)、英海軍に敗北(1588年)

21

日本の短期・中長期的課題

- []:「歴史の危機」
↓
- []:短期的課題(10年)＝近代の後始末
これに失敗すると、中産階級が消滅
↓
- []:中長期的課題(30～50年)＝ポスト近代社会の設計図づくり(21世紀の「リヴァイアサン」)、21世紀の精神の中心領域は何か？

22

「技術」の時代の終わり

「中立化と脱政治化の時代」(1929) (『カールシュミット著作集 I』長尾龍一編)

- 16世紀…「神学の世紀」
- 17世紀…「形而上学の世紀」(西欧合理主義の英雄時代)
- 18世紀…「啓蒙の時代」
- 19世紀…「経済主義の時代」
- 20世紀…「技術の時代」(技術進歩教という宗教が誕生、宗教の魔術性が技術の魔術性へ転化)
- 「技術は、いかなる強力な政治にも利用されることになる。…現代は、政治的なものが失われる過程の最終到達点でありながら、政治的なものを復権する最大の可能性を秘めた歴史的地点である」

「近代文明とは…」(『カール・シュミット著作集 II 1936-1970』長尾龍一編、慈学社出版、2007、p326)

- 近代文明とは、超越的なものを放棄し、正義を力に、信義を予測可能性に、真理を世論の合意に、美を趣味に、キリスト教を平和団体へと、価値を変造した。

23

II. 短期的の課題(10年)

—「蒐集」からの撤退＝デフレ圧力
…デフレとのたたかい

24

【短期的課題(10年程度)】

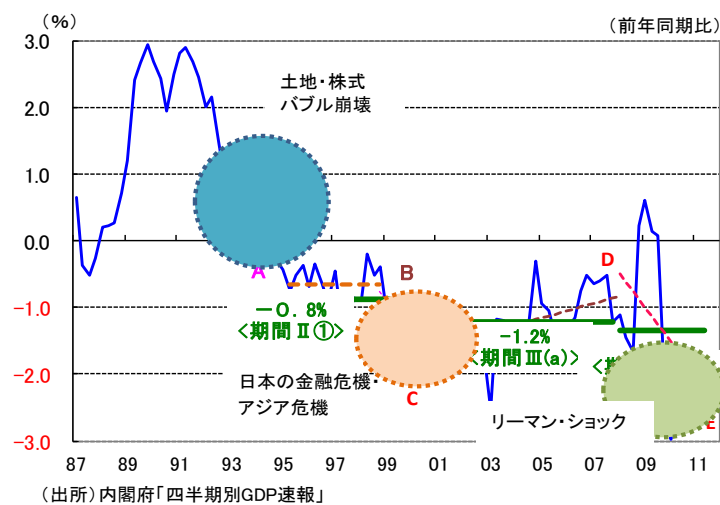
「蒐集」からの撤退＝デフレ

⇒デフレとのたたかい＝脱近代へのステップ

- ①新興国の先進国に対する優位(「陸と海のたたかい」カール・シュミット)⇒生産の増加ほどに伸びない所得(資源価格の高騰、輸入物価の上昇、**外需デフレーター**の下落)⇒エネルギー国産化計画
- ②金融経済の実体経済に対する優位(「3年に一度バブルが生成・崩壊」ローレンス・サマーズ)⇒GDPギャップの拡大(**内需デフレーター**の下落)⇒金融量のコントロール、トービン・タックスなど
- ③資本の労働に対する優位(労働分配率の低下)⇒**賃金の下落**⇒資本と労働の再契約

25

GDPデフレーター: バブル崩壊で大幅に下落

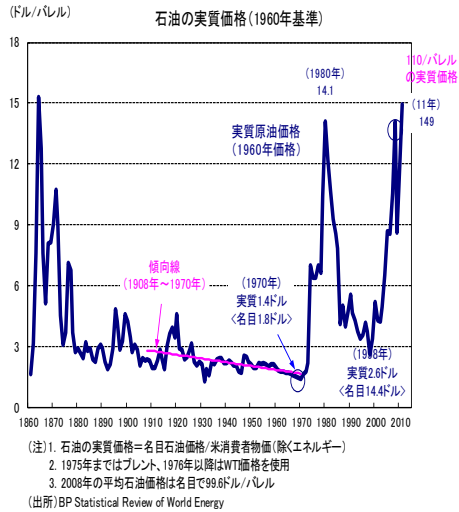


26

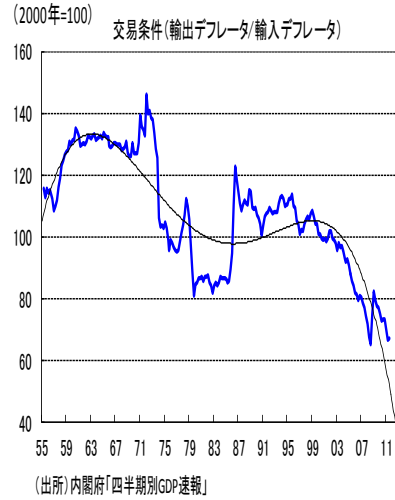
①「陸と海のたたかい」・・・先進国の交易条件悪化

21世紀の価格革命- 資源国の交易条件が好転

資源国の交易条件

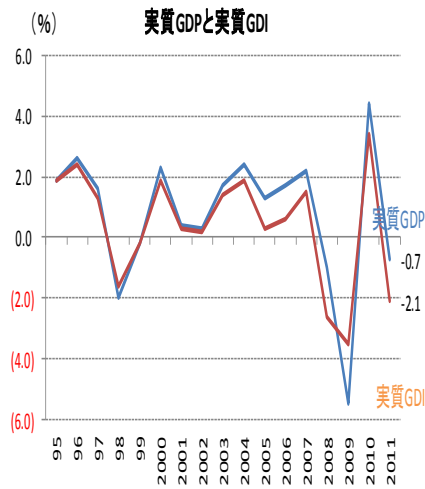


日本の交易条件

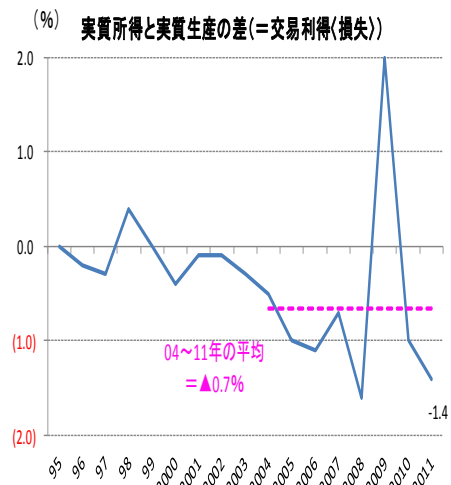


生産(実質GDP)増に追いつかない所得(実質GDI)

・・・04年以降、実質GDP=+0.6%、実質GDI=▲0.1%



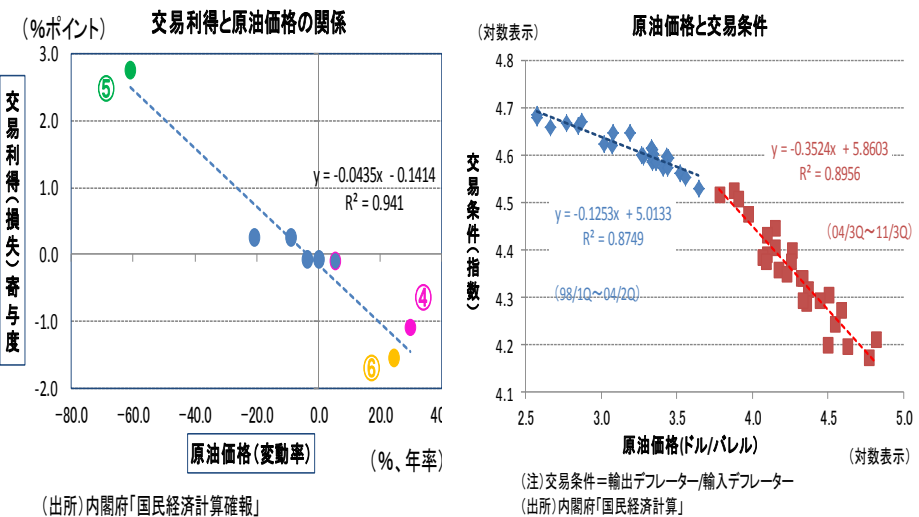
(注) 実質GDI=実質GDP+交易利得(損失はマイナス)
 (出所)内閣府「四半期別GDP速報」



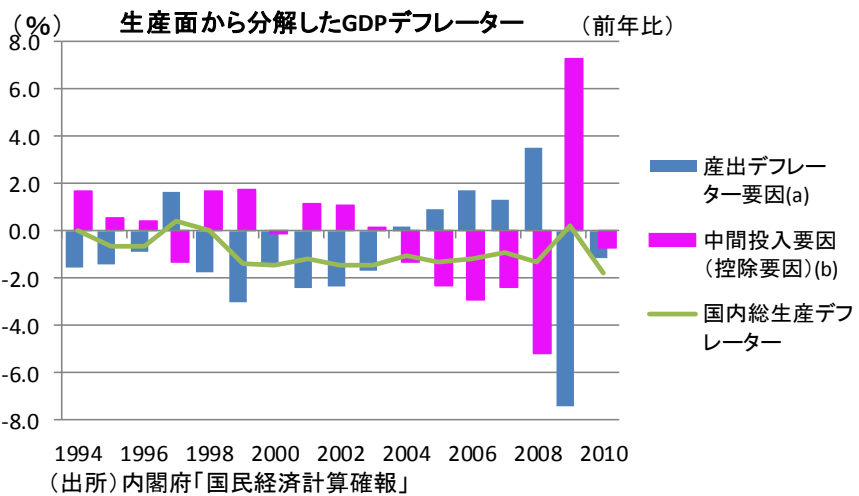
(出所)内閣府「四半期別GDP速報」

28

原油価格20%上昇⇒交易損失0.9%発生

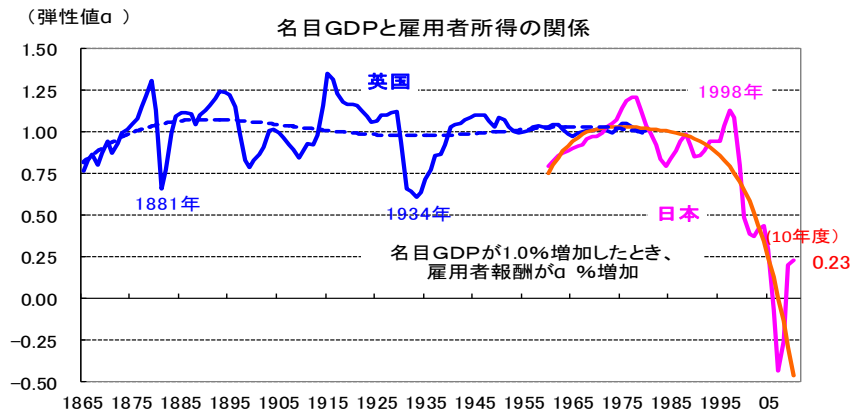


(定義式) Δ GDPデフレーター
 $= \alpha \cdot \Delta$ 産出デフレーター $- \beta \cdot \Delta$ 中間投入デフレーター



②資本と労働の「再契約」

限界労働分配率1.0⇒1998年を境にゼロへ



- (注) 1. 弾性値 α を求めるとき、一次回帰式 $y = \alpha \cdot x + \beta$ 、 y = 雇用者所得(対数表示)、 x = 名目GDP(同)、推計期間 = 10年とした。
2. 日本の場合、大企業製造業の y = 人件費(雇用者所得)、 x = 限界利益(名目GDP)を用いた。
(出所) 原書房「イギリス歴史統計」(B・R・ミッチェル)、財務省「法人企業統計季報」

31

Ⅲ. 中長期的課題(30～50年)

- ① 主権国家システムを超えて(ヘドリー・ブル『国際社会論』(1977年))
- ② 「もっと速く、もっと遠くへ、より合理的に」からの脱却・・・地域主権(7つの経済圏で自己完結)

32

ヘドリー・ブル『国際社会論』
 (1977、臼杵英一訳、2000、岩波書店)

- 主権国家システムの基本的属性は、第一に、**多数の主権国家の存在**である。第二に、一つのシステムを形づくっているとみなされるような、ある程度の**相互作用が主権国家に存在**していること。第三に、一つの社会を形づくっているとみなされるような、**ある程度の共通規則と共通制度の承認**である(p281)
- 「主権国家システム」とは・・・二カ国以上の国家が、相互に十分接触をもち、お互いの決定に十分な影響を与え合う結果、それらの国家が一少なくともある程度は—全体の部分として振る舞うようになるとき成立する(p10)

33

(主権国家システムを超えて、pp298～299)

- ① **システムであるが社会ではない**・・・第一と第二の属性を有してが、第三の属性をもたない(第一次対戦～第二次大戦まで)
- ② **国家の集合であるがシステムではない**・・・第一の属性はもっているが、第二の属性をもたない(19世紀以前に存在)
- ③ **世界政府**・・・第一の属性を欠く(たとえ、確立されるとしても、短命に終わる以外、考えられない。現代は、帝国の分裂の時代である)
- ④ **新中世主義**・・・**権威と権力の分離**
- ⑤ **非歴史的選択肢**・・・**道徳的・政治観念における革命、ないし科学的・哲学的思想における革命**

34